

県ラグビーフットボール協会

70年の歩み



1947年	県ラグビーフットボール協会設立。初代会長は松倉直吉氏（同志社大OB、元岐阜市議会議長）
1948年	関商工高ラグビー部創部
1953年	国体高校の部（当時）に加納高が県勢初出場
1957年	草創期の社会人選抜の中核となる岐阜基地ラグビー部が発足
1959年	岐阜工高ラグビー部創部
1962年	岐阜国体に向け、教員チームが発足
1965年	岐阜国体開催。同年に山口正昭氏ら有望なラグーマンを採用した教員部の準優勝。高校の部で出場した岐阜工高も準優勝
1967年	埼玉国体の教員の部で初優勝。以降5連覇を成し遂げる黄金期が到来した
1970年	富野肇氏が県ラグビーフットボール協会第2代会長に就任 県内初の岐阜ラグビースクールが開設。初代校長は松尾三雄氏
1972年	緑ヶ丘中（関市）に県内初となる中学校のラグビー部創部
1974年	山口正昭氏が率いる関商工高が、第53回全国高校ラグビー大会（花園）で3位に輝く。県勢過去最高位
1978年	朝日大ラグビー部創部
1981年	藤井孝男氏が県ラグビーフットボール協会第3代会長に就任。歴代最長の35年間にわたり、重鎮を担った
1984年	薫田真広氏（当時岐阜工高3年）が、高校日本代表に選ばれる。前後して吉田賢治氏、安江健二郎氏、加納孝久氏、武山哲也氏、村山邦彦氏（いずれも関商工高出）らが同じく高校日本代表に選ばれる
1991年	薫田氏が第2回ワールドカップに初出場
1995年	薫田氏が第3回ワールドカップに日本代表主将として出場
2000年	吉川充氏が朝日大ラグビー部コーチに就任
2006年	朝日大が全国地区対抗大学大会で、初出場・初優勝
2008年	ぎふ清流国体で成年の主力を担う「ぎふ清流ラグース」が発足
2012年	ぎふ清流国体開催。成年が3位入賞 朝日大が第49回全国大学選手権に初出場。以来、5年連続出場中
2015年	長良川競技場（岐阜市）で、トップリーグのオールスターチャリティーマッチを開催。同年のワールドカップで一躍脚光を浴びた五郎丸歩選手もプレーした 後藤毅氏が県ラグビー協会理事に就任
2016年	田代正義氏が県ラグビーフットボール協会第4代会長に就任。同協会初の事務所（羽島郡岐南町）を開設 一般社団法人県ラグビーフットボール後援会発足、初代代表理事に山口眞里氏が就任
2017年	県ラグビーフットボール協会70周年



座談会出席者

田代正義	県ラグビーフットボール協会会長 パローホールディングス会長兼社長
藤井孝男	県ラグビーフットボール協会名誉会長 元運輸相
後藤 毅	県ラグビーフットボール協会理事長 県ラグビーフットボール後援会理事
薫田真広	日本ラグビーフットボール協会特命理事・ 日本代表チーム15人制強化委員長 （岐阜工高ラグビー部出身）
吉川 充	朝日大ラグビー部監督 県ラグビーフットボール協会理事
山口眞里	県ラグビーフットボール後援会代表理事 県ラグビーフットボール協会顧問／中部薬品社長
杉山幹夫	県ラグビーフットボール協会特別顧問 岐阜新聞名誉会長・岐阜放送会長



70年にわたる協会の歩みや県ラグビー界の将来について熱く語り合った座談会出席者＝岐阜新聞本社（撮影・安藤茂喜）

県ラグビーフットボール協会 70周年 記念座談会

夢へのトライ
岐阜がスクラム

県ラグビーフットボール協会は今年9月に創立70周年の節目を迎える。1980年代の人気絶頂期、日本が歴史的な快進撃を果たした一昨年のワールドカップなど、日本ラグビーの栄光の軌跡と歩調を合わせ、同協会も発展を遂げてきた。
29日には岐阜市の長良川球技メドウで、70周年を記念

―県ラグビー界を長年支えてくれた皆さんの「ランビー」の出会い
田代 私は早稲田大学時代。（後に日本代表でもプレーした）宿



澤（広明）選手がいて、チームも盛かった。社会になっても、ラグビー場に行けば自然と旧友と出会える。青春の思い出の詰まったスポーツだ。
山口 私は大学時代から好きだったが、深入りし始めたのは最終、トップリーグのチャリティーマッチをなんとか岐阜に招聘できないかと、いつか、ラグビー関係者のつながりが新にできた。
藤井 中学年の時にラグビー部に入部したがきつかけ。本日はバ

高いレベルのラグビーに出合える場を 田代氏



ックスをやりつつあったが、3年間ワオワードの石ワロップを務めた出場した場合は全部負けてしまったが、聖地獄穴（グラブ）でプレーした思い出は決して忘れられない。
後藤 中学時代に関商工高ラグビー部の山口正昭監督（故人）からスカウトされた時、当時から体もつちりつちりした、近所の先輩が部屋に入ってきたこともあり、山口監督が直々に中学校に来て、ラグビーの世界に引き入れてもらった。
薫田 ラグビーの最初の印象は、テレビでアメリカンフットボールの世界、すっごう中学まで野球をやっていたので、最初は甲子園に出なくて岐阜高に入社したが、当時のラグビー部顧問の我々の代を導いた、いかに誘ってくれた。ま、中学の恩賜（1955年の岐阜国体、岐阜国体の教員部でプレーした経験もあり、運命的な出会いだった。
吉川 私も最初は硬式野球をレレしていたが、中学でラグビー部の先輩から誘われて始めた。一度プレーしたら爽快で、すべりこな

杉山 一昨午、岐阜市で行われたトップリーグのチャリティーマッチを拝見し、プレーのレベルの高さに驚いた。さらに田代、藤井の新旧会長の偉業ぶりに脱帽したのが特に印象的だった。
―65年の岐阜国体での教員の部の活躍は、県ラグビーの活性化に大きく寄与したか。
後藤 数多くの優秀な大卒指導者が教員選手として岐阜に来た。その指導者が各高校に散らばり、戦い合うように県内を駆け巡り、戦い合っただけでなく、花園で3位入賞した。私の恩師の山口正昭監督の一人。



年代をまたぐ「縦の連携」で一体的強化 後藤氏

藤井 山口正昭監督がでた後、私は地産地消を名目に山口良治さんちに在籍していた。2人の絆、高松ラグビーのレベルも上がった。特に私は山口正昭監督と公私ともに仲良くさせていた。た、山口の指導は大変だが、普段は、ソコで大変だが、大物だった。両方持ち合わせた監督の人柄が、生徒から慕われて、チームの結束力が上がり、花園で3位入賞する原動力になった。
―関商工高で、奥でし烈な争いを繰りかえしている薫田さん出身の岐阜工高の存在をどう見ていますか。
薫田 大変厳しい練習だった。ラグビーの楽しさ、仲間との連帯や、我慢（こ）を学んだ貴重な経験。年間だった。花壇も指導する。関商工高という県内の太極拳があったこと、自分たちのラグビーを磨く上で大きかった。
藤井 欲を言っても、1校、同校に並ぶだけの学校があれば、さらに切磋琢磨があったはず。県ラグビー界のレベルアップのためにも今後に期待したい。
―高松だけでなく、その他の世代の強化も必要。強化の歴史が長い。大学や社会人の強化の現状は。
吉川 実業団のヤマハ発動機引退し、2000年から朝日大を指導するようになった。3、4年後にはだんだん指導に携わって、5年目に全国地区対抗大会に東海・北陸代表として初出場するまでになった。それが良い転機となり、次第に何名かな選手も入学し始め、徐々に競争力が上がってきた。

した「県ラグビー祭」（岐阜新聞・ぎふチャン共催）が開かれる。同協会の田代正義会長をはじめとする関係者や、県ラグビー界の発展に寄与した元選手による座談会を開催。輝かしい歴史を回顧し、今後のさらなる発展への意気込みを聞いた。
（聞き手は、桐山圭司・岐阜新聞取締役編集局長）

「清流レディース」のように女子も活性化 藤井氏



後藤 12年のぎふ清流国体で、朝日大OBが多数を占めるラグビーチーム「ぎふ清流ラグース」が、成年男子チームの主軸として活躍し、3位入賞と健闘していた。やはり高校生以下だけでなく、大学生をはじめとする成年の強化も同時に進めることが大切だと感じた。
―世代横断的な強化の取り組みは。
後藤 これまでの課題は、小中学生のジュニアスクールや高校校を年代ごとに分けて、縦の連携が弱かったこと。昨年、全県のカテゴリーで国体ベスト8入りを目指すとす「Bプロジェクト」を立ち上げて、一体的な強化を始めることにしている。
―ラグビーの盛んな諸外国の強化で参考になる点は。
薫田 「オールラウンド」で有名なニュージーランドでは、年齢や男女だけでなく、体重別にチームを分けている。安面に配慮すること、子どもたちも安心してラグビーを楽しめる。また、ニュージーランドの女子のユニフォームが、男子のユニフォームと違って、プレーを楽にするカラフルに進んでいる。国内でも、家族みんなで週末にラグビーで汗を流せるような環境ができれば。

吉川氏 仲間との絆を実感できるスポーツとして



―最後に、今後の県内のラグビー振興への提言や意気込みを。
吉川 まずチームが強くなること。子どもたちに夢を与えられる存在に育てることを一番大切にしたい。ラグビー普及の面では、子どもたちが幼少期にさまざまなスポーツに触れることは成長する上でも大きな利点になる。ラグビーは体力づくりに役立て、仲間との絆を実感できるといい良い点をもっとアピールしたい。
藤井 五郎丸歩選手がラグビー日本代表が、ワールドカップで五輪で活躍して、メディアの注目を集まっています。ラグビー普及のチャリティスマイルを起している。県ラグビー界もその流れにしっかりと乗って、さらなる発展を遂げていきたい。
山口 県勢の枠組みとは別に、子ども向けのミニラグビー大会を主催したり、トップリーグのサトリサンゴリアスの選手による指導会を開催したりして、これかも続けたい。

田代 ワールドカップで英国を訪れた時に感じたのが、市民が参加するラグビーの多さ。日本はプレーする上でも、観戦する上でもまだ不十分。私は地元の前道少年団に属しているが、地元に住む競技経験者がボランティアでもにも教えており、約50年間地元で根付いている。ラグビーも学校などの既存の枠組みではない、地域が主体となる最小単位のコミュニティが盛んになれば、子どもたちが競技の楽しさを伝える機会をさらに増やすのではないかと。



レジェンドの意志継ぐスター選手輩出を 杉山氏

杉山 その意味でも29日の記念試合が、次の世代を担う子どもたちにラグビーへの関心を喚起してくれる一つの機会になる。本場に行かず、試合を観た子どもたちがラグビーを始め、薫田さんや日本代表監督も務めた平尾誠三さん（故人）、黄金期の朝日大監督で同監督としてをはずした松澤健治さん、日本代表15人制強化委員長の杉山幹夫さんの意志を継ぐスター選手が生まれることを期待したい。
田代 ラグビーとして競技の醍醐味は底力の基。その一つの要素が子どもたちがレベルの高い試合に触れる機会を多くすること。私が学生時代にラグビー場に足づく通ったように、今の子どもたちにもラグビーとの貴重な出会いを提供したい。それが私たちの使命だ。そして、ラグビーに携わる者の使命だ。
―薫田さんのように次の日本代表を目指す子どもにもメッセージをいただけますか。
薫田 前回のワールドカップで引退した、オールブラックス前主将のリッチー・モロウさんは、若い時から、部屋の天井にオールブラックスの旗を飾りつけて貼っていたと、いつ、未来のラグーマンには、もっとまっすぐな、という姿勢だ。目標を掲げて、高校や大学で全国大会で上位進出する具体的な目標を立て、自らの成長を促してほしい。指導者も、ラグビーの楽しさを教えるとともに、成長し続けたいという心と目標設定の大切さを教えてあげてほしい。
―今日はありがとうございました。

くんだ・まさひろ 岐阜工高でラグビーを始めると、在学中に頭角を現し、花園出場、高校日本代表にも選出された。筑波大在学中に日本代表に初選出されると、ワオワードのブッカーなどとして活躍。ワールドカップ（W杯）には第2回から3大会連続で出場、1995年の第3回大会では主将を務めた。2000年に現役引退。その後、指導者の道を進み、社会人・東芝では監督として日本選手権、トップリーグなど数々の優勝に導いた。日本代表ではU-23監督、フル代表のアシスタントコーチなどを歴任。1966年、各務原市生まれ。